目　次

はじめに――『伊勢物語』と四季と――……1

第一章　春の物語（一）――物語冒頭部をめぐって――……9

はじめに……9

一　初段に潜在する春……10

二　二段の男を支える春……15

三　〈春雨〉の表象……18

四　「起きもせず」歌の表現性……26

五　四段の春と人……29

六　物語冒頭部と春……34

第二章　春の物語（二）――物語冒頭部以後――……39
一　問題の所在……39
二　春前半の物語の少なさ……39
三　桜の季節……50
四　花の美と凋落と……52
五　残りの諸段の春……64
第三章　夏の物語……67
はじめに……67
一　夏の動揺の物語……68
二　他の夏の物語……85

三　夏の段以外の動揺の希薄さ……86
四　夏の動揺の背景――段の構成枠としての季節観……90
第四章　秋の物語――衰退凋落をめぐって――……95
はじめに……95
一　衰退凋落の季節としての秋……95
二　和歌における秋の美の衰退凋落と、秋物語と……98
三　秋の「露」の物語……107
四　死と無縁な秋の「露」の物語……114
五　菊花の美……115
第五章　冬の物語――雪をめぐって――……125
一　問題の所在……125

二　和歌の冬・漢詩文の冬……127
三　『伊勢物語』の冬物語……135
四　春の雪から……137
五　春の雪の章段の〈希望〉……141

【各論】

第六章　古代の夏の季節感――和歌集夏部のホトトギス詠を手掛かりに――……149
はじめに……149
一　『万葉集』巻第八・十の夏のホトトギス詠……151
二　『万葉集』の鶯・雁との比較……161
三　『古今集』の夏……166
四　『後撰集』から『拾遺集』へ……174
五　苦の夏……179

六　古代の夏の季節感……183
第七章　四十三段の夏の物語……189
はじめに……189
一　『万葉集』のホトトギス詠と男女……192
二　『新撰万葉集』のホトトギスの歌と詩……195
三　『古今集』以後のホトトギス詠と男女……197
四　四十三段の夏物語……205
第八章　六十段の二面的男像――朱買臣像の重層的引用――……209
はじめに……209
一　近世以前の把握……211
二　近現代の把握……213

三　朱買臣像の重層的引用……219
四　優美さの裏の悪意――動揺の夏……225

第九章　『詩経』衛風「氓」と『伊勢物語』九十六段・六段
――男の物語の屈折点――……229

一　問題の所在……229
二　衛風「氓」の世界……231
三　「氓」と九十六段・六段……233
四　「氓」世界の特徴……237
五　「氓」の『伊勢物語』的変形と、九十六段における男物語の屈折……241
六　六段の場合……244
七　「氓」受容の広がり――結びに代えて……247

終章　本書の考察の概要と文学史的展望――四季の時空の男主人公像――……253

一　本書の考察の概要と結論……253
二　『伊勢物語』から『源氏物語』へ……256
三　四季の時空の男主人公像……259

初出一覧……263
あとがき……265
索引……267

はじめに――『伊勢物語』と四季と――

伊勢物語全体において四季（春夏秋冬）はどのような意義を発揮しているのか。これが本書の問題意識である。

もちろん四季はその現れ方自体、段によって様々であろう。春夏秋冬といった表現それ自体が段の物語にある場合もあれば、暦日、儀式、行事、風俗、気候、景物などの具体的様相の形をとって、四季が段の物語に現れる場合もある。本書においては、春夏秋冬それぞれの視野において、各季節に関わる右諸要素と関連しながらどのような諸段の物語が実現しているかを確認し、季節ごとの特徴を把握してみたい。各季節の物語は、それぞれ古今集に最も明瞭に現れる四季観を確かに踏まえつつも、それをまるごと継承するのではなく、特有の形で四季の物語を実現しており、そこに伊勢物語の特徴を看取できる、と考える。本書における考察は、それゆえ伊勢物語の特徴を、和歌集・漢詩文集などの四季を背景に置きつつ、四季の時空の次元において明らかにしようとする試みだ、と言うこともできる。

このような観点からの考察を稿者に促したのは、拙著『平安朝物語の形成』（笠間書院、二〇〇八）の第二篇であった。その考察においては、源氏物語全体がいわゆる「景情一致」と呼ばれる深い真実性に覆われている事態に着目し、この事態を背後で支えている物語の方法性を抽出しようとした。そして諸考察の結果、うつほ物語と源氏物語の春夏秋冬それぞれの物語部分に存在する、一定の内容的偏向を見出しそれを根拠に、四季が二つの物語の構想と構成の枠組みとなっている事態を推定することとなった。うつほ物語においては物語の多元性ゆえに物語中間部において見えにくくなっているもののそれは小異に属す。四季は客観的・物理的な時空の枠組みとしてあるにとどまらず、それぞれの季節ごとに特有な物語内容が実現する時空としてあり、四季を元基として二つの物語の具体的内容が不断に分節され、構想・構成されて、長篇的物語の部分部分が形作られていくのだと考えられる。

大づかみに捉えれば、平安朝の物語において四季は飛躍的に重要性を増していったと言ってよい。物語最初の作品

と目される竹取物語において終局部にのみ見えた四季的要素が、伊勢物語においてかなり多くの章段に広がり、うつほ物語から源氏物語に至って、ほぼ物語全体を覆うようになっていることを見れば、事態は明らかである。ただし、それはそう見えるというに過ぎず、どのように四季的要素が個々の物語において意義を発揮しているのかは、現在のところまだ十分に突き止められていないと考えられる。うつほ物語と源氏物語における四季の構想枠としての意義の考察は、その試みの一つとして提出されたものに過ぎない。そしてその考察は自ずと、うつほ物語以前はどうであったのかという問いを呼び起こすことになった。本書で伊勢物語における四季の意義を考察しようとするゆえんだ。

ここで学界周知のことではあるが、片桐洋一氏による伊勢物語の成立過程論（明治書院『伊勢物語の研究［研究篇］』など）に触れ、稿者の立場を明らかにしておく必要がある。片桐氏は、古今集や業平集といった外部資料にそれぞれの集成立時点における伊勢物語の状態が反映していると考え、それらに見られる業平歌の様相に、伊勢物語が古今集以前から拾遺集以後までほぼ百年間にわたり次第に成長し増益されていった過程を推定された。①古今集の業平歌には、集成立当時、歌中心・場面中心の短小な物語（二十章段以下あるいは十二章段とも言われた）であったことが反映し、②在中将集・雅平本業平集には後撰集成立後しばらくたった頃、右に増補を加えた物語（四十五章段あるいは二十数章段、三十四章段とも言われた）であったことが反映し、③右以外の章段には、拾遺集以後さらに増補された物語（百二十五章段）となったことが反映しているという。

このような成立説であるがゆえに、おおむね三段階とも見られる複数の成立段階は長期にわたり、またそれぞれの段階における作品全体を支える〈作者〉も複数となり、各段階で付加されていく物語の意味もそれぞれ微妙に異なり重なり合っていくこととなる。具体的には①業平本人の〈純粋な愛〉の物語に、②業平身辺の後人による〈純粋な愛の物語への憧憬〉の物語と、③物語の享受者の創作した〈色好みの英雄〉の物語とが付加された、三層の意味が重なる物語となっているとされる。作品の創作性も①の自記の段階から、③へと次第に大きくなっていくという。

しかしその論理操作には厳しい批判も多い[1]。成立過程の問題は、〈作品外の事実〉そのものとして確かめられなければならないが、結局現在のところ〈作品外の事実の解釈〉が存在するにとどまるようである。そのことと合わせて、平安時代の史料に、上記した①②の段階の物語の流布した形跡が明確に残っていないとすると、伊勢物語の成立過程の全体は依然として霧の中にあるとすべきなのだろう。言うまでもなく、古今集以前から拾遺集以後にかけて伊勢物語が次第に成長していったとする仮説はあってよいが、実際の成立過程はあるいはその説通りでないかも知れない。とすると現状では、上記多段階成立説を大前提として伊勢物語に対して向き合うのではなく、それに拠るのを留保して、古今集前後の和歌や漢詩文などを視野に入れつつ、伊勢物語全体をどのように読めるのかその可能性を様々に探ることが、なお必要とされているのであろう。本書の考察もその一端としてある。ともあれ物語全体の表現の豊かさと深さの実態を確かめることがなによりも重要であって、それらがあって初めて、多段階成立説等との不断の突き合わせ作業も伴いながら、物語の成立過程の全体が次第に明晰に見えてくるのではないだろうか。

ここで暦日、儀式や行事、風俗、気候、景物などの表現を根拠として、伊勢物語各段の背後に四季を推定してみたい。推定の根拠は、本書では基本的に古今集と後撰集の四季部に求める[2]。季節をある程度限定できる表現を有する章段はもちろんのこと、特定の季節を連想することが可能な章段も考察の対象とする。具体的には、前者の章段は特定の季節を背景とすると推定できる諸表現が地の文にある場合であり、後者の章段は歌にのみそれら諸表現がある場合である。なお後者の段にはカッコを付す。物語本文の文字数を、岩波文庫本（大津有一校注　一九六四）で句読点等の記号も含めて数える。それが次頁に示す表1である。百分率は四季全体の中に占める比率で、小数点第二位を四捨五入した。

考察の性質上、六十九段、百一段など判断に迷う場合がどうしても出てくるが、全体的な傾向はほぼ知ることができる。段数と字数の上で目に付くのは、春・夏の多さと冬の少なさである。なお表1に含まれない、季節的背景を窺えない段は、七十七あって全章段の半数を超え、字数が一二三八一字と物語全体の五三・二％を占めるから、四季の

物語上の意義には一定の限界があると考えられる。

《表1》

	段数	字数（%）	段の詳細
春	18	3459（31.7）	2、4、（12）、17、20、29、（49）、67、（68）、77、80、82、83、85、90、91、（97）、（121）
夏	12	4381（40.2）	9、39、43、45、52、60、（62）、（65）、96、99、104、107
秋	15	2286（21.0）	6、18、（22）、（25）、（37）、51、（54）、（56）、58、（59）、94、（95）、98、（105）、（106）
冬	3	771（7.1）	41、81、84

主要歌集の四季部における歌数は次の表2のようになる。カッコ内は百分率で、各季節の占める比率である。

《表2》

歌集と部立	万葉集 巻十 相聞	万葉集 巻十 雑歌	万葉集 巻八 相聞	万葉集 巻八 雑歌	古今集（四季部）	後撰集（四季部）	拾遺集（四季部）
春	47	78	17	30	134（39.2）	146（28.9）	78（29.8）
	125（23.2）		47（19.0）				
夏	17	42	13	33	34（9.9）	70（13.8）	58（22.1）
	59（10.9）		46（18.7）				
秋	73	243	30	95	145（42.6）	226（44.7）	78（29.8）
	316（58.6）		125（50.6）				
冬	18	21	9	19	29（8.5）	64（12.6）	48（18.3）
	39（7.2）		28（11.3）				

まず夏に注目すると、どの歌集においても秋や春より少ない。万葉集では多かった秋が古今集・後撰集では春に移る形になり、春秋均分化の方向に進むと見え、それは拾遺集に至りさらに明確化すると考えられるが、その過程を通じて夏の少なさは同じである。一方、伊勢物語の夏は段数では春秋より少ないものの、字数では四季の中で最も多い。伊勢物語において、夏の物語が中心をなし、問題性を含む内容となっていることを看取できる。また秋は万葉集において半数を超え、古今集以下においても四割を超える。ところが伊勢物語においては二割程度である。冬が一割前後にとどまることは、万葉集から後撰集まで変わらず、これは伊勢物語も同じである。ただし伊勢物語の冬が、万葉集の巻十や古今集に近い、最も少ない程度にとどまることは、押さえておいてよいのかも知れない。全体として伊勢物語は、夏が中心を占めると言えるほど多く、ついで春が続き、秋冬が少ないという特徴を持つのである。このような特徴は、歌の詞書をはるかに超えた散文叙述を持ちつつも、和歌的世界に深く繋がり歌を軸とする、伊勢物語の核心部を示唆している可能性がある。

もちろん本書で試みようとする四季の観点からの考察には、先に述べたように一定の限界がある。四季と関連する章段が全体の半数程度にとどまり、四季に関わらない物語内容が物語の中心部を形作っている、と考えられるからである。このような四季ならざる部分の優勢は、初段や百二十三段以後といった物語の冒頭と結末部、あるいは物語の中心部をなす六十九段に、四季が直接的な形で見られないことにも窺える。しかしそのような限界内で、四季は有効に機能し物語世界を支えているのではないか。

以下各章で、各季節ごとに物語の有する特徴を考察する。また〈各論〉においては、四季が古代文学や伊勢物語においていかに機能しているのかを、特に夏を中心に考察する。これらの諸考察を通じて、伊勢物語が古今集的な四季を特有な理路で踏まえつつ物語世界を成り立たせていること、このような事態がうつほ物語や源氏物語の四季の先蹤

となっていること、以上二点を明らかにしていきたい。なお終章において、各章の考察の概要を確認し、伊勢物語全体における四季の意義をまとめ示した上で、作品の四季の文学史的位置づけを試みる。

注

（1）石田穣二『新版伊勢物語』解説（角川書店、一九七九）、田口尚幸『伊勢物語相補論』（おうふう、二〇〇三）。

（2）四季観を探る以上、古今集・後撰集の四季部に根拠を求めることとなるのは必然的だが、その妥当性を直接示すことはできない。ただし以下各章で具体的に確かめるように、伊勢物語の四季の物語は全体として、右勅撰集の四季部との間で何ら大きな不整合・矛盾を惹起しないと考えられる。特徴的な変形や偏向を伴いつつも、右勅撰集の四季部をぴったり継承している物語の様相に、根拠の妥当性を間接的に窺うことができる。

引用本文について

＊本書で用いる主要文献の本文は以下の通りである。

＊左記以外の本文による場合は、引用の際に注記する。左記一覧以外の文献で注記のない場合は、通行の本文による。

＊なお、引用するに当たって、私意により表記を一部改めた箇所がある。漢文学の訓読・訳をはじめとする具体的な手続きについては、そのつど記す。

日本書紀　『新編日本古典文学全集』（小学館）
万葉集　『新編国歌大観』、『《補訂版》万葉集　本文篇』『万葉集　訳文篇』（塙書房）
祝詞　『日本古典文学大系』（岩波書店）
類聚三代格、令集解、続日本紀から日本三代実録までの五国史　『新訂増補国史大系』（吉川弘文館）
懐風藻　『日本古典文学大系』（岩波書店）
凌雲集　『群書類従』（続群書類従完成会）、小島憲之『国風暗黒時代の文学　中（中）』（塙書房）
文華秀麗集　『日本古典文学大系』（岩波書店）
経国集　『群書類従』（続群書類従完成会）、小島憲之『国風暗黒時代の文学　中（下）Ⅰ・Ⅱ』、『下Ⅰ～Ⅲ』（塙書房）
菅家文草・後集　『日本古典文学大系』（岩波書店）
新撰万葉集　『新編国歌大観』、『対釈新撰万葉集』（勉誠出版）
伊勢物語　『新編日本古典文学全集』（小学館）
枕草子　『新編日本古典文学全集』（小学館）
源氏物語　『新編日本古典文学全集』（小学館）
本朝文粋　『新日本古典文学大系』（岩波書店）、『本朝文粋註釈』（冨山房）
詩経　『十三経注疏・毛詩正義』（北京大学出版社）、『漢詩選Ⅰ　詩経（上）』（集英社）
文選　『文選　附考異』（台湾芸文印書館）、『全釈漢文大系』（集英社）
北堂書鈔　『北堂書鈔』（中国書店）
芸文類聚　『芸文類聚』（中文出版社）
初学記　『初学記』（北京中華書局）
白孔六帖　『白孔六帖』（上海古籍出版社）
白氏文集　『新釈漢文大系』（明治書院）

元稹集　『中国古典文学基本叢書』（北京中華書局）

伊勢物語の古注釈の本文は、以下のものに拠った。

和歌知顕集　片桐洋一『伊勢物語の研究（資料篇）』（明治書院）

伊勢物語愚見抄（再稿本）　片桐洋一『伊勢物語の研究（資料篇）』（明治書院）

伊勢物語肖聞抄　片桐洋一『伊勢物語の研究（資料篇）』（明治書院）

伊勢物語宗長聞書　片桐洋一『伊勢物語の研究（資料篇）』（明治書院）

伊勢物語山口抄　『続群書類従』（続群書類従完成会）

伊勢物語惟清抄　『続群書類従』（続群書類従完成会）

伊勢物語闕疑抄　片桐洋一『伊勢物語の研究（資料篇）』（明治書院）

伊勢物語拾穂抄　『国文学注釈叢書』（名著刊行会）

勢語臆断　『契沖全集』（岩波書店）

伊勢物語古意　『賀茂真淵全集』（続群書類従完成会）

伊勢物語新釈　『国文学注釈叢書』（名著刊行会）

＊引用箇所を、冊数（漢数字）・巻名・引用箇所冒頭の頁数（洋数字）の順で、本文末尾カッコ内に示すことがある。

＊和歌の本文は新編国歌大観による。ただし第六章の万葉集のみ右の塙書房版による。歌番号は新編国歌大観によるが、万葉集歌は旧大観番号を付す。

第一章　春の物語（一）――物語冒頭部をめぐって――

はじめに

春の諸段を改めて示す。二、四、（十二）、十七、二十、二十九、（四十九）、六十七、（六十八）、七十七、八十、八十二、八十三、八十五、九十、九十一、（九十七）、（百二十一）の諸段である。春を背景とすると推定できる諸表現が地の文にあるのは十三段、歌にのみそれら諸表現があるのは五段である。

初段から六段までを「物語冒頭部」と仮称し、四段までを本章の考察範囲としたい。右の春の一覧に初段を加え、省略した三段、五段も補うと、物語冒頭部の四季の様相は以下のようになる。〈初段（春）―二段春―三段？―四段春―五段？―六段秋〉。初段の春をカッコでくくったのは、以下述べるように物語の背後に春が潜在すると考えるからである。とすると、間に季節不明の三段と五段を緩衝として挟みつつ、春を背景として物語の始まっている様相が浮かび上がってくる。本章では物語冒頭部の各段がそれぞれ様相を異にするものの、共通して春を背景とすることによって、物語の始まりを支えているのを確認してみたい。

ここでやや先走ることとなるが、伊勢物語の春についての稿者の見方を示し、本章の考察を具体的に位置づけよう。稿者は、伊勢物語の春が〈始まり〉と〈始まりの終わり〉という二つの意味を有し、そして前者を背景に導入するのが物語冒頭部であり、後者の〈始まりの終わり〉の意味を背景に導入するのが冒頭部以後の春の諸段である、と考え